

第210回くらしの植物苑観察会 2016年9月24日(土)

## —水環境保全に果たす水草の役割—

林 紀男(千葉県立中央博物館 主任上席研究員)

水草は、古くから私たちの生活と密接な関係を築いてきました。衣食住のみならず、祀りなどさまざまに活用されてきました。この内、水環境の視点から水草を考えると、水生生物のすみ処・隠れ処として大きな役割を担っていることが知られています。水草が水環境保全の立役者といっても過言ではありません。

しかしながら、近頃は各地の池沼で水草が姿を消しています。身近な水辺を想起された多くの方が、たくさん水草が生えている景観を思い浮かべ、自分の知る水辺は水草が豊に茂り絶滅とは無縁と勘違いされます。水辺に水草があっても、葉を空中に展開する抽水植物(ヨシ、マコモ、ヒメガマ等)や、葉を水面に広げる浮葉植物(ヒシ、アサザ、ガガブタ等)など、限られた種が大きな群落を形成しているに過ぎない事例がほとんどです。たくさん種類の水草たちが織りなしていた豊かな水辺の景色は既に失われています。特に水の中に葉を展開する沈水植物(ササバモ、クロモ、セキショウモ等)という仲間は多くの水辺で絶滅しており、千葉県でも印旛沼や手賀沼はじめ多くの池沼で野生絶滅の状態です。地域から人知れず絶滅した水草が数多くあることは悲しむべき現実です。

水草は、水辺を彩る綺麗な花を咲かせる仲間(ハス、スイレン、ホテイアオイ等)が広く知られます。可憐な花や美しい葉など水草の奥深さは、アクアリウムプランツとして趣味性の高い分野をも開拓しています。しかし、広く世界から集められ市販されている移入の水草たちは、いつの間にか野生逸脱して定着し、各地の水辺で外来種の異常繁茂を招いています。環境省は侵略性が高い種を「特定外来生物」に定め法律で移動などを厳しく制限しています。特定外来生物に指定された植物全13種の内、過半数の7種が水草です。その7種(ナガエツルノゲイトウ、ミズヒマワリ、オオカワヂシャ、オオフサモ、ブラジルチドメグサ、ボタンウキクサ、アメリカオオアカウキクサ)全てが印旛沼・手賀沼で確認されているという現実をご存じでしょうか? ホテイアオイ、オオカナダモ、オランダガラシ(クレソン)などの外来水草も多くの場所で認められます。

今回は、1) 富栄養化した池沼の水面を緑に染める植物プランクトンのアオコ、2) アオコ問題解決の切り札と位置づけられる動物プランクトンのミジンコ、3) ミジンコ礁として大きな役割を担う沈水植物、4) 地域から絶滅した土着の沈水植物復活させる切り札となる眠っているタネ(埋土種子)、5) 猛威を振るう外来水草、などを紹介します。「風が吹けば桶屋が儲かる」ならぬ「水草の復活はミジンコの復活を通じ水環境保全につながる」という話題です。

.....

**次回予告** 第211回くらしの植物苑観察会 2016年10月22日(土)

「野生きのこの見分け方・暮らし方入門」 吹春 俊光(千葉県立中央博物館)

13:30~15:30(予定) 苑内休憩所集合申込不要